

インド ハイデラバードより新年のご挨拶

三井物産(株) Sneha Farms 社出向

宮迫 敦

飼料輸出入協議会関係者の皆様、新年明けましておめでとうございます。
インドはハイデラバードより、謹んで新年のお慶びを申し上げます。

デリーやムンバイについては皆様も一定のイメージをお持ちかと思えますので、赴任後 10 カ月程度ではありますが、ここでは極力ハイデラバードの特徴をお伝えします。

◆ハイデラバードについて

ハイデラバードはインド南部テランガーナ州の州都で、「真珠の街」として知られる歴史ある都市です。映画産業（RRR、プシュパ、バーフバリ等のトリウッド）や IT 産業が盛んで、人口は約 1,000 万人規模、インド有数の IT・医薬品（製薬）拠点でもあり、近年著しい成長が見られます。ムスリム人口が比較的多く、イスラム文化と南インド文化が融合した独自の街並みと食文化が特徴です。



IT 企業集積地付近の景観

◆「時間」の概念

インド人は“時間にルーズ”だと聞いていましたが、ハイデラバードに来て「ルーズ」という言葉ではまだまだ言い足りない感覚を覚えました。

「10時から打合せ」と言えば、当然9時50分には準備完了が当然ですが、当地では10時半を過ぎても誰も現れず、11時半頃に現れた本人が何事

も無かったかのような表情をしていることも珍しくありません。なかなか清々しい気持ちにさせられます。遅刻してきた人の100人中95人が「渋滞が酷くて」という決まり文句を述べる点も非常に興味深いものです。

とは言え、不思議なもので、気付けば私自身も「5分遅れは誤差」という感覚を持ち始めています。インドに染まる速度は想像以上です。

◆食文化

ハイデラバード生活で最初に直面する試練は料理の「辛さ」です。南インド料理の辛さは他地域の比ではありません。店員の「No Spicy!」という言葉葉を信じて口に運んだ瞬間、舌は灼熱、汗と涙が同時に噴き出します。

もっとも、ただ辛いだけではありません。ハイデラバード名物のビリヤニに代表されるように、スパイスの使い方は実に奥深く、辛さの奥にしっかりと「旨さ」が存在します。一口目は悶絶、二口目で汗が止まらず、三口目には「なぜかもう一口食べたい」と思ってしまう。この中毒性こそがインド料理の恐ろしさです。結果として、「辛い」、「無理だ」と言いながらも、気づけばまたビリヤニを注文している自分がいます。



ビリヤニ

◆交通事情

ハイデラバードの交通事情は、最早インドの中でも上位のカオスです。道路では常時クラクションが鳴り響き、車線を守らない車で溢れかえっています。前からも後ろからも、そして何故か横からも車が現れ、逆走車が正面から迫ってくることも日常茶飯事です。バイクは道路の隙間という隙間を縫うように走り、車と車の間を複数台が同時にすり抜けていきます。信号待ちの間にも台数は増え続け、気づけば自車はバイクに完全包囲されていま

す。そこに牛やヤギが横断し、人がその横を悠々と歩き、さらに栄養不足の野良犬が加わることで、一種の生態系が完成します。

そんな中、警察官が交差点に立っていますが、交通整理をする様子はありません。時折、気分次第で車やバイクをランダムに停止させ、運転手にペナルティを支払わせています。警官に止められた場合、交通違反というより「運」の問題であり、不運だったと受け入れるしかありません。



原付 6 人乗り



凄まじい渋滞

◆ハイデラバードの医療事情

医療機関を訪れて感じるの、その設備水準の高さです。最新鋭の CT や MRI、内視鏡設備に加え、都市部の国際病院では日本と遜色ない医療インフラが整備されています。外観や機器だけ見れば、「医療先進国」と言っても違和感はありません。

然し、実際に診療を受ける段階になると、状況は少し異なってきます。

予約時間通りに診察が始まることは稀であり、待ち時間は“目安”に過ぎません。30 分待ちは想定内、1 時間待ちは通常、2 時間を超えることもざら。

一般、事前予約の上、人間ドックを受診した際、内視鏡の医師がなかなか現れない事態が発生。自身は既にベッドの上で待機状態。看護師に状況を確認すると「緊急の手術が入ってしまった」とのこと。仕方ないな…と思いつつ待っていたところに、「ごめん、渋滞が酷くて」と言うお決まりのセリフと共に医師が登場。「看護師の言う“緊急手術”とは何だったんだ…？」との

思いはありつつも気持ちを落ち着かせました。その後、看護師から、「麻酔課の医師が来るまで待って下さい」と言われ、“おいおい、まだ始まらないのか？”との思いが…。30分程して現れた麻酔師からは、「ごめん、渋滞が酷くて」とのコメント。また渋滞か！との気持ちをぐっところえ、その後は無事に内視鏡検査、人間ドックを終了。

医師の知識・技量は高く、診断そのものに大きな不安を感じることは少ないのですが、その医師に辿り着くまでのプロセスが一種の試練となります。医療インフラは整っているものの、ソフト面の運用が追いついておらず、効率的とは言えません。インドの医療に於いても“忍耐力”は求められるのです。

◆ハイデラバードの学校事情

ハイデラバードには「International School」と名のつく学校が星の数ほどあります。当然のように“世界各国の子どもたちが机を並べ、多文化が交差するインターナショナル空間”を想像します。ところが、実際に学校の門をくぐると衝撃の事実が判明します。インターナショナルなのに、学生ほぼ全員インド人。先生もインド人。校長もインド人。娘2人をインターナショナルスクールに通わせていますが、外国人は娘2人のみです。

最初は親子共々戸惑いますが、半年も経つと、こんな環境にも慣れ、娘2人にも沢山の友達が出来、今や楽しそうに学校に通っています。

◆お祭り文化

インドでは祭りが「特別なイベント」ではなく、「生活そのもの」です。一つの祭りが終わると、間を置かずに次の祭りが始まります。しかも、どれも驚くほど長い。1日で終わる祭りはほぼ存在せず、3日、5日、7日が標準仕様です。三日三晩、爆竹が鳴り響き、音楽が夜通し流れ続けますが、取り締まりという概念は見当たりません。

こうした祭り文化の延長線上に、自然な流れで組み込まれているのが結婚式です。結婚式は、「人生で最も重要な祭り」として位置づけられており、

ペリ・コドック、エンゲージメント、サンギート、式本番、アフターパーティー（レセプション）。こうした儀式や催しが連日続き、1週間以上要することも珍しくありません。どの工程も手加減はなく、全てが本番です。2,000人を超える参加者、派手な色彩、音楽は止まらず、料理は山のようには並びます。インド人は祭りが好きで、派手な演出を愛し、良い意味で見栄っ張りです。だからこそ、結婚式という“人生最大の祭り”には一切の妥協がありません。

インドの祭り、そして結婚式。それは単なる行事ではなく、「全力で人生を祝う」という、この国の国民性をも表現しているのかもしれません。



参列したレセプション壇上の様子

◆最後に

当地での生活は、混沌、熱気、辛さ、渋滞、そして笑顔と、実に多様な要素に満ちています。一見するとストレスに感じる出来事もありますが、日々を重ねるうちに、それらを「これもインドらしい」と笑って受け止められるようになります。人々の明るさや街に溢れるエネルギーに触れる中で、戸惑いの多かった日常は、次第に心地よいものへと変わっていきます。

ハイデラバードは、価値観や効率だけでは測れない世界があること、そして人生はもっと自由であってよいのだと、改めて気づかせてくれる街です。機会がございましたら、ぜひ一度ハイデラバードに足をお運びいただき、当地の空気や活気を直接感じていただければ幸いです。

最後になりますが、皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。